

— 書 評 —

『野鳥界 識別編』／『同 生態編』

山岸 哲 (監), 石塚 徹 (著) 159 頁／285 頁
2016 年 4 月／同年 6 月 信濃毎日新聞社
2,000 円＋税／2,200 円＋税
ISBN : 978-4-7840-7281-1／978-4-7840-7285-9

本書については、すでに本誌 65 巻 2 号で、濱尾氏が卓越した探鳥者あるいは研究者の視点から書評を寄せられている。そこで、我々は学生教育で使われることを想定し評してみたい。そこで、まず、ユーザー（学部生）の立場から金谷が本書概要について記し、次いで、参考書として使わせる立場から浅川が記す。なお、金谷は、浅川のゼミ生で、将来は鳥類臨床を目指すという。探鳥経験は少ないが、鳥専門病院を開業すれば、傷病野鳥が持ち込まれるし、持ち込む顧客も相当な知識を具有するはずなので、それなりの準備をせよと常常指導し、本書はそのような過程で邂逅した。

(文責 浅川)

本書の識別編は身近な鳥類の識別の手掛かりとなる特徴が描画された体裁をとり、生態編で豊富な写真によりその生活や分布のなどの情報が詳述されていた。識別編の章立ては「野山の鳥」、「水辺の鳥」および「見る機会の少ない鳥」で、それぞれの章は「スズメのような鳥」、「庭や公園に来る中くらいの鳥」、「くちばしの太い小鳥」などの項で構成されていた。熟練した観察者には「？」と感じるかもしれないが、自分（金谷）のような初心者には有益で、たとえば、同編「本書の使い方」(6～12 頁)の「鳥の体型と各部の名前」として、「くちばしの短い鳥」には「フクロウ類、ヨタカ、…」、「足の長い鳥」には「サギ類、ツル類、…」など、体の各部位に着目し、瞬時に大まかの識別をするには有効であった。また、随所に配された「撮りルポ」という写真付きコラムも魅力的で、個人的には「ミユビシギ 驚異の高速一本足走行」(90～91 頁)が印象的であった。生態編の章立ても識別編と同じで、豊富な写真を用い、前編を補完することが目的とされたものであろうが、独立した書籍としても、十分、成立していた。可愛いイラストを眺めるだけでも自然と興味が沸いてきて、読み進めたいくなるような仕組みが随所にあった。また、近年数の少ないライチョウ(138～139 頁)やブッポウソウ(242～243 頁)で

は、保全という観点からその現状を知ることが出来た。生態編にも「トリのキモチ」と名付けられたコラムが興味を助長してくれた。なお、この「キモチ」とは進化によって洗練されたものと、若干わけありの個体差により、遺伝子に組み込まれている選択肢から、状況に応じた柔軟な行動を指し(4～8 頁)、複雑な一夫多妻制をとるクロツグミの雄が多く雌と交尾するために囀りを使い分けること(100～101 頁)、空中生活に特化したアマツバメが天候に応じた柔軟な成長をすること(58～59 頁)、ヨシキリが産卵する際、性比を操作していることなど(80～81 頁)などが例示されていた。以上のように、本書は鳥類臨床医を目指すものにも多くの有益な情報の源泉であった。

(文責 金谷)

獣医学の正規課程では鳥類医学は講ぜられていない。そのために、その医療を目指すものは道無き道を切り開いてきたパイオニアでないとならない。もっとも、熟練した獣医師も誕生しつつあるので、まず、初学者はそのような専門医のもとでみっちり研鑽することが第一となる。一方、獣医学課程では「野生動物(医)学」という科目が必修化されて久しいが、このような鳥類医療の基盤となる知識をバックアップするには、あまりにも役不足である。そのため、意志のある学生は優良書を使って独習しなければならないのである。

幸か不幸か、日本には鳥類関連の書が数多あるが、この中から、白紙の学生に、一体、どれを読んでもらうかが大問題となる。本書もそのような目で分析した。まず、本書が図鑑の機能が期待された「識別編」。濱尾氏が指摘したように、初心者への配慮が細やかであることは確かである。特に、写真の多くが長野県で撮影されたので、本州中部で探鳥をするのなら実用的な優れた参考書になるだろう。たとえば、イソシギを「識別編」(85 頁)で見つけ、その繁殖地を「生態編」(161 頁)で見、容易にイメージできる。それぞれの書末尾には、当該種の両編における掲載頁が併記されており親切であった。なお、寄生虫病を専門にする評者として、「生態編」のイワツバメ水浴びの記載にハジラミ寄生が原因とするコメント(54 頁)は注目された。確かに、この特異的ハジラミ類は長野県飯田市の浄水場で多数が死亡した個体の消化管からも多数見出され(羽繕い時に摂取、胃内から検出)、相当悩まされていたものと想像した。されど、だからといって、水浴びと結びつけるのは如何なものか。ハジラミ類は他の鳥類でも普通に寄

生するし・・・

ところで、生粋の道産子で、そのまま北海道石狩地方の大学に進学した金谷のような鳥好き学生にとっては本書のラインナップに少し違和感を憶えたかもしれない。その大学構内にも普通に生息し、時折、入院してくる身近なはずのミヤマカケス、ハシブトガラ、ヤマゲラなどの記載は無く、ゴジュウカラやオオジシギのように高山のみ生息

などと書いてある。もっとも、そのような違和感(=日本列島の多様な鳥類相の理解)を持ってもらえればしめたもの。もちろん、そうなれば間違い無く教育的な効果は高いとされよう。

(文責 浅川)

金谷麻里杏・浅川満彦
(酪農学園大学 獣医学群獣医学類)